

シンポジウム（運動器）

2026年11月14日（土） 16:20 ~ 17:50 | 第1会場（天瑞：4F）

シンポジウム（運動器）

座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック），矢野 剛士（獅子目整形外科病院）



〔講師紹介〕

田中 創（タナカ ソウ）

福岡整形外科病院 臨床研究センター
福岡整形外科病院 リハビリテーション科
愛知医科大学 医学部 疼痛医学講座

〔職歴〕

2003年4月 副島整形外科病院 リハビリテーション科 入職
2013年1月 九州医療スポーツ専門学校・付属クリニック 入職
2019年4月 福岡整形外科病院 リハビリテーション科 入職
2022年4月 愛知医科大学 医学部 疼痛医学講座 研究員
2024年3月 福岡整形外科病院 臨床研究センター 研究員（兼任）

〔学歴〕

2003年3月 西日本リハビリテーション学院 理学療法学科 卒業
2018年3月 畿央大学大学院 健康科学研究科 修士課程 修了
2022年3月 愛知医科大学大学院 医学研究科 博士課程 修了

〔主な資格〕

理学療法士，専門理学療法士（運動器），博士（医学）

〔業績〕

- Tanaka S, et al. Sex Differences in Preoperative Pain Intensity Among Patients Undergoing Total Knee Arthroplasty: A Propensity Score-Matched Cross-Sectional Study. Osteoarthritis Cartilage. 2026;34(5),707-715.
- Tanaka S, et al. “But it feels swollen!”: the frequency and clinical characteristics of people with knee osteoarthritis who report subjective knee swelling in the absence of objective swelling. PAIN Reports. 2021;6(4), e971.
- Tanaka S, et al. Identifying participants with knee osteoarthritis likely to benefit from physical therapy education and exercise: A hypothesis-generating study. Eur J Pain. 2021;25(2),485-496.

ResearchMap: https://researchmap.jp/loose_no_6

〔主な社会活動〕

日本運動器理学療法学会（理事） 日本理学療法士協会（代議員）
日本疼痛学会（代議員） 日本運動器疼痛学会（代議員）
日本ペインリハビリテーション学会（代議員）

〔受賞歴〕

第28回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会 最優秀賞
第32回 福岡県理学療法士学会 優秀賞
第12回 日本リハビリテーション栄養学会学術集会 最優秀賞
第6回 日本運動器理学療法学会 大会長賞

シンポジウム（運動器）

2026年11月14日（土） 16:20～17:50 | 第1会場（天瑞：4F）

シンポジウム（運動器）

座長：遠矢 拓己（なかむら整形外科クリニック）、矢野 剛士（獅子目整形外科病院）

運動器理学療法「躍進」のためのケーススタディ ケーススタディを通して再考する運動器理学療法の臨床推論

田中 創（福岡整形外科病院 臨床研究センター，福岡整形外科病院 リハビリテーション科，愛知医科大学 医学部 疼痛医学講座）

運動器理学療法におけるケーススタディは、単なる症例報告ではなく、個々の患者が呈する多面的な問題を統合的に理解し、臨床推論を深化させる重要な営みである。近年、エビデンスに基づく理学療法（Evidence-Based Practice: EBP）の重要性が強調されている一方で、実際の臨床では、単一の病態や評価指標のみでは説明できない複雑な症例に遭遇することが少なくない。

特に運動器疾患では、構造的病態のみならず、疼痛メカニズム、身体機能、心理社会的因子、生活環境などが相互に影響し合うため、個別性を踏まえた統合的視点が求められる。ケーススタディは、こうした複雑性を可視化し、「なぜこの患者にこの問題が生じているのか」、「どのような評価・介入が必要なのか」を臨床推論として整理できる点に意義がある。

また、ケーススタディは、臨床で得られた実践知を共有し、新たな研究課題や仮説生成につながる重要な役割も担う。特に近年では、疼痛科学やバイオメカニクス、心理社会的評価など多面的評価が進む中で、症例を通じて病態理解を深める重要性はさらに高まっている。

本シンポジウムでは、運動器疾患に対する理学療法実践を例に、疼痛・機能・病態をどのように統合して臨床推論を行うのか、またケーススタディを通して理学療法実践をどのように深化させるかについて議論したい。